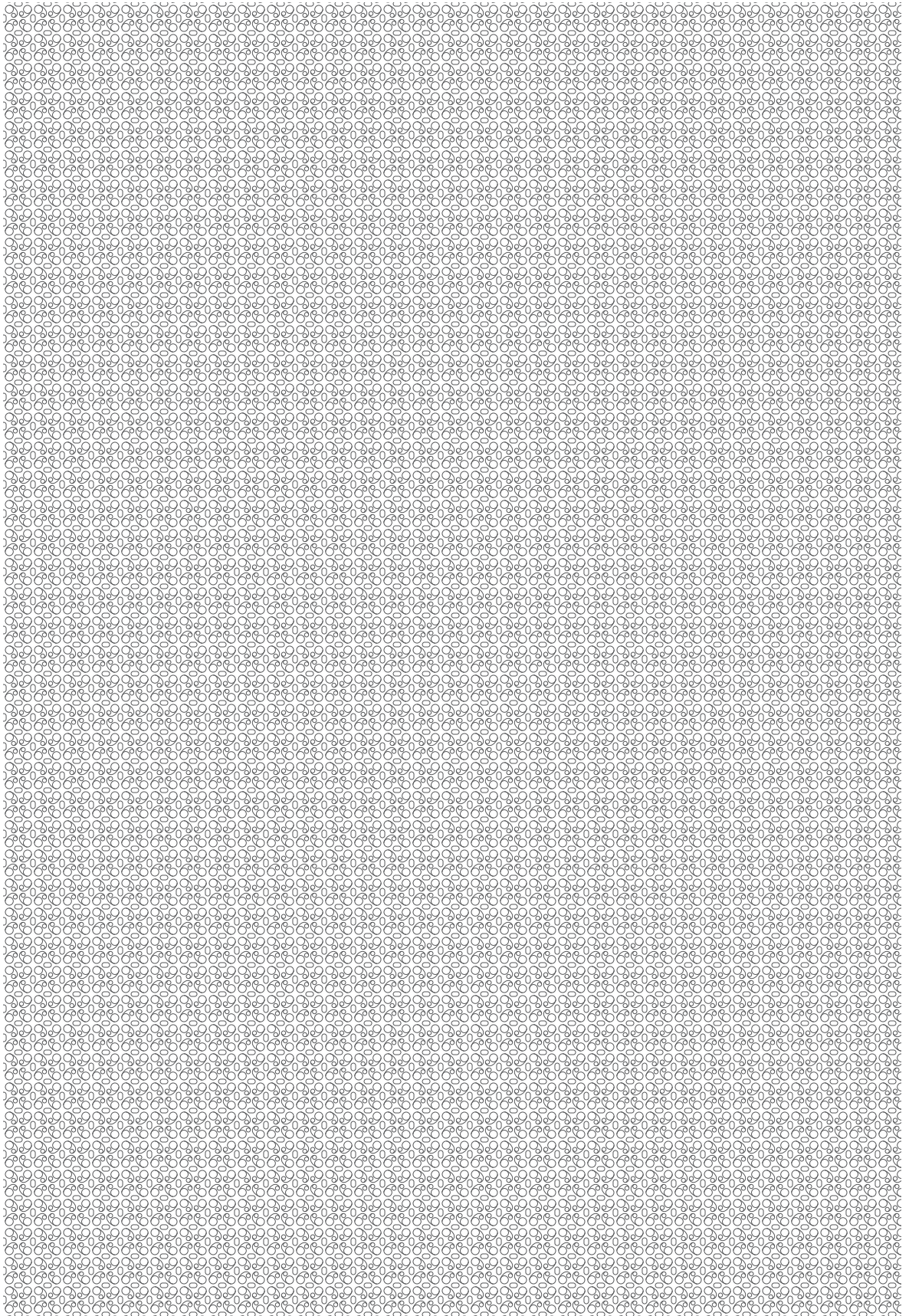


2026年度入学試験問題

国語

(試験時間 15:00～16:00 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、一度マークした箇所を修正する場合、しっかりと消してください。消し残りがあると、解答が無効となることがあります。また、消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入・マークしてください。未記入や記入・マークミスなどがあった場合は、当該科目の解答は無効になります。



— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

日本社会において「個性ブーム」と呼ばれる状況は大きく言って二度起こっている。最初は一九一〇～二〇年代を中心とする期間であり、そして二度目に相当するのが一九八〇～九〇年代である。この二度目のブームの幕開けを象徴する存在が、黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』（一九八一年）である。

この書の中で描かれ、そして多くの読者に深い印象を残すことになった主題のひとつが、まさしく「個性」だった。同書で描かれていたのは「個性尊重の自由な教育」を志向したトモエ学園でのエピソードの数々である。一年にして公立の小学校を退学になるほどのトットちゃんの強烈な個性を、決して否定することなく受け止め、包容した小林校長と、彼のもとで展開されたトモエ学園の「個性尊重」の教育実践に、一九八〇年代を迎えた頃の人々はすっかり魅了されていたのである。

『窓ぎわのトットちゃん』が空前のヒットとなった一九八一年に、書籍売り上げにおいて年間ベストセラーの第二位につけたのは、田中康夫著の小説『なんとなく、クリスタル』であった。同書からは「クリスタル族」という造語も生まれ、また映画化もされ、やはり社会現象と言えるほどのブームが引き起こされている。

一見したところまったく異質なジャンルの読み物ながら、『窓ぎわのトットちゃん』と『なんとなく、クリスタル』という二つの作品が同じ年にベストセラーとなったことは、画一の時代からの離脱という一点において、じつは奥深いところでツウテイする出来事であったように思われる。前者は (2) 的な文脈において、そして後者は (3) 的な意味合いでもって、いずれも共に「個性化」時代の幕開けを、ねじれた形で象徴していたのではなかっただろうか。

ここでごく簡単に『なんとなく、クリスタル』の概要を紹介しておくことにしよう。同書の主人公は、ファッションモデルのアルバイトをしながら都心の大学に通う女子大生・由利である。由利は海外勤務の両親から離れて、青山の高級マンションで年上のボーイフレンドと同棲生活（とくせい）を送っている。彼女が日々実践しているのは「なんとなく気分のいい、クリスタルな生き方」である。「なんとなく気分のよいものを、買ったり、着たり、食べたりする。そして、なんとなく気分のよい音楽を聴いて、なん

となく気分の良いところへ散歩しに行ったり、遊びに行ったりする」。同書の中では、由利を中心とする若者たちの、そうした都会的で優雅な日常が描かれていく。

しかし同書の刊行当時、そうした筋立て以上に話題を集めたのは、本文中に登場する東京都内の地名や大学名、ファッションブランド、アーティスト、レストラン、聞き慣れないカタカナ語などに対して、一つひとつ著者の独自の視点からそれらを解説した注が添えられていたことである。その数は四四二個にも及んでおり、その総体はあたかも、当時における都市生活ガイドのような様相をテイ⁽⁴⁾していた。同じ頃、『anan』(一九七〇年創刊)や『non-no』(一九七一年創刊)といった女性誌や、『宝島』(一九七三年創刊)、『ブルータス』(一九八〇年創刊)といった若者向けのサブカルチャー誌が売り上げを伸ばしており、これらの出版物によって広く浸透し始めていた商品カタログ文化と、それはきわめて親和的なものを含んでいたと言える。つまり同書の全体を通して表出されていたのは、凡庸さを忌避し、趣味の良さをひたすら追求しようとする消費社会の感性であった。そしてこうした感性は、後述する通り、消費活動を通じた人々の差異化の欲望と結びつくことによって「個性」の自己演出を帰結するものだと言える。

もちろん主人公自身の感覚からするならば、それは快適な生活をただ純粋に希求しているだけのことだっただろう。しかし、そうした無自覚の認識構造そのものが実に消費社会的特徴の一部というべきである。一九八〇年代の日本社会は、まさしくそうした段階に到達しつつあったわけで、高度経済成長を経て、欧米社会へのキャッチアップを完了し、国民全体の生活水準は大きく底上げされた。というよりむしろ、日本経済の状況はそれにも増して好調だった。米国に次ぐ世界第二位の経済大国として日本社会はひとつの隆盛をきわめようとしていたのだった。豊かで平等な、しかし均質で画一的な生活環境が一定程度まで行きわたったところで、社会全体が一転してこんどは「個性化」を求める状況が生まれつつあったことになる。

さて、ここでいう消費社会とは、産業の高度化に伴い、生産活動よりも人々の消費行動によってもたらされる構造的特質が顕著化した段階の社会状況を表現した概念であるが、そのことに関する代表的な議論といえば、いうまでもなくジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』である。以下、「個性」論としての観点から、あらためて彼の所論について振り返っておくこ

とにしよう。

ボードリヤールの議論の要諦は、つまるところ差異をめぐる人々の欲望についての解析学である。高度大衆消費社会に到達した社会では消費を通じた欲望が解き放たれ、産業の独占的集中のもとで現実的差異が消滅してゆくがゆえにこそ、かえって差異の崇拜が起こるのだという。一定程度にまで進行した画一化、均質化のいわば反作用として、スタイルや地位を表示するためのわずかな差異が、人々の追求すべき欲望の対象として浮上し始めるのである。

そしてこの文脈において、ここでいう「差異」は、そのまま「個性」へと置き換え可能であることは言うまでもない。ボードリヤールに言わせると、「個性化」に向けた努力は、個性喪失の時代の個性再創造の企てにはかならない。そして、そうした感性に対して強く訴えかけてくるのが、商品の宣伝文句の数々である。

たとえばメルセデス・ベンツは、消費者に向けて七六色六九七種類の内装を用意して、「個性的な好みと欲望をきつと満足させられるにちがいありません」と謳いあげる。そしてヘアカラーの広告は、「自分の個性を発見してそれを発揮すること。それは本当に自分だけの楽しみを発見することです」と、髪の色を少しだけ変えることで、「今までよりずっと本当の私に」なることを提案してくるのである。

しかしながら彼のみるところ、このように「個性化された」ナルシズムはまったくもって矛盾に満ちている。自分自身で選んだ理想を追求しているつもりであっても、ここで「本当の自分」を実現しようとする営みは、結局のところ、集団の命令に対して最も忠実に従っているにすぎず、「押しつけられた」モデルに最も接近していることにほかならないからである。「消費社会における個人のナルシズムは独自性の享受ではなく、集団的特性の屈折した姿である。とはいえ、それは「最小限界差異」を通じて、常に自分自身への自己トウスイ的熱中のかたちで現れる」。

このようなボードリヤールの議論に従うなら、「個性的であること」が価値となり、人々がこぞってその追求を図ろうとする事態は、消費社会下における差異崇拜の現れということになるだろう。臨時教育審議会（臨教審）答申の中に「個性重視の原則」が打ち出されたことは、消費社会化に呼応する事態でもあったわけである。

(7) 一九八〇年代の日本社会は、たんに教育界のみならず、そもそもが社会全体的なレベルにおいて「個性」が召喚される条件が整いつつあったと言える。実際のところ、臨教審における「自由化」論自体、学校教育＝消費者に対する「サービス」として見立てる観点を内包するものであったから、なるほどそのスタンスは「消費社会的」だったとも言える。学校が提供するサービスが商品であるのだとすると、消費者にとってそれは「選ぶ」ものであるべきだし、また「選ばれる」存在であるためには、それぞれの学校の「個性化」が図られなければならない、という論理がそこには伏在していたのだった。

はたしてこのような「消費社会」という切り口だけでもって、この時期の状況が十全に説明しつくせるものであるかどうか分からないが、ともあれ画一性を嫌悪し、差異をこそ価値あるものとして追求する空気が、社会全体的な規模で充満していたことはたしかだろう。そして「個性」をめぐる語りは、まさしくそうした社会的要請に適合するようなかたちで機能していたと言える。

ここでは、こうした個性言説の機能をさして「差異化のレトリック」⁽⁸⁾と呼ぶことにしたい。一九八〇～九〇年代を中心とする二度目の個性ブームは、ひとえにこの「差異化のレトリック」が前景化していった局面として理解することができはるはずである。さて、このような消費社会下における「個性」の氾濫をめぐる状況については、これまで少なからぬ数の論者によってさまざまに論じられてきたが、その中でも特に注目しておきたいのは、一九八〇年代以降の若者文化をめぐる議論である。そこで指摘されてきたのは、個性の追求が若者たちにとっての強迫観念に転じてしまっているという事態であり、そしてそこにははらまれた病理的な症状の数々であった。

たとえば浅野智彦は、女性誌『anan』が、一九八〇年代初頭以降、スターのようになることなく、个性的であること、自分らしくあることを称揚する語り方を打ち出していった変化を指摘したうえで、その特徴について次のように論じている。

『anan』における個性の追求は二つの相反する語り方を接続することによって成り立っていた。一つは、「誰もが個性を持つている」という語り方。もう一つは、「あなたが個性とと思っているものはほんとうの個性ではないかもしれない」と

いう語り方。前者は個性への信仰を高めるものであり、後者は現に手にしている（と信じられている）個性を懐疑するものである。この二つが接続されることによって、「たしかに存在するはずの、しかしまだ手にしていない個性」をはてしなく探究し続ける人々を促す誘惑あるいは強迫が生み出される。

そしてこのように「個性的なるもの」へと人々を駆り立てる空気は、九〇年代以降も広く社会に浸透していくことになる。もちろん直接的に「個性」とは謳っていないくとも、「自分らしさ」や「自分探し」、⁹「かけがえのない自分」、「キャラ（が立つ）」といった表現の数々は、その派生的表現のバリエーションとみるべきであって、これらの表現の流行は、なるほど「個性」を志向する感受性の拡がりを投影したものであったろう。

臨教審答申に連なる、その後の「個性化」路線と呼ばれる教育政策の方向性は、こうした価値観に対して親和的に作用するものであったことは言うまでもない。このような「個性化」の要請を生徒たちが自身に深く内面化していくならば、果たしてどんな結末が待ち受けることになるだろうか。浅野はそこに、「勉強だけが人生じゃない」という一面的なメッセージを受けとり、学校的な価値観から安易に離脱する若者たちの態度を生み出されてしまった可能性を指摘している。

市川昭午は、臨教審以後の「個性化重視の教育」の「ヘイガイ」として、「平凡であってもバランスをとれた性格で真面目に働く人々を、平均的な人間として軽蔑し、偏狭で奇矯^{ききょう}な行動をとったり、自堕落な生活をする人々を個性として称賛するような風潮に拍車をかける結果となっている」と指摘している。

さらに極限的な状況として、それは少年犯罪にも投影されているとみるのが土井隆義の一連の議論である。土井は、とりわけ一九九〇年代以降、個性化教育の理念が「心の教育」というもうひとつの教育理念と結びつくことによって、「個性的であること」が子供たちの達成すべき新たな文化目標になったのだと指摘している。ところが、そこで追求される「個性」には「第三者の視点からの客観的評価というものが存在しない。ただひたすらあおられるだけで、「ここまで到達できればOK」というゴールが見えづらい」。つまりそこには、かつて社会学者エミール・デュルケームが語ったところの「無限性の病」としての特徴が

看取されるというのである。

かくして子供たちは、決して充足の域に達することのない肥大化した個性化願望を絶えずあおられ続けることになる。しかし現実にはもちろん、個性を發揮し得るだけの特別さに誰もがめぐまれていくわけではないから、そうした環境の中からは、マイナスの個性に対してまでプラスの価値を見いだしてしまうトウサクも起ってくる。二〇〇〇年前後に相次いだ少年による凶悪事件（「一七歳の犯罪」と呼ばれた）の社会的な背景は、まさしくそれであったというのが土井の見解である。異常性を帯びた犯罪行為に手を染めることによって、世間から注目されることに至上の快楽を見いだそうとしているかのように映る彼らの姿は、若者の個性願望の反転した事態として理解できるといっているのである。

一九九〇年代以降のユースカルチャーをめぐる議論の中で指摘されていたのは、「個性的でなければならぬ」という観念にとり憑かれた若者たちの「個性化」願望のはらむ病理性であった。これらの指摘が妥当なものであったとするなら、ここに生じた事態は⁽¹¹⁾たいへん皮肉な状況だったと言わなければならないだろう。というのも、そもそも臨教審のもとでの教育改革の文脈においては、学校教育に備わる画一性のもたらず閉塞状況こそがもつばら批判対象であって、「個性化」路線はその対抗軸として打ち出されたはずのものであった。しかしながらその個性主義もまた、ふたを開けてみれば別の方向での閉塞状況へとつながっていたことになるからである。

（河野誠哉『個性幻想』による）

注 トモエ学園……東京の自由が丘にかつて存在した私立幼稚園・（旧制）小学校。臨時教育審議会……一九八四年に教

育改革をテーマに総理大臣直属の諮問機関として設置された審議会。「個性重視の原則」「教育の自由化」などを提案した。

〔問一〕 傍線(1)(4)(6)(9)(10)に相当する漢字を含むものを、左の各群のA～Dの中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) ツウ[|]テイ

A トウ[|]テイ納得できない

B 権力に[|]テイ[|]コウする

C 現状をコウ[|]テイする

D テイ[|]キ[|]圧が接近する

(4) テイ[|]して[|]いた

A テイ[|]サイを[|]気にする

B 試験のニッ[|]テイ[|]を[|]確認する

C 記念品をシン[|]テイ[|]する

D 条約をテイ[|]ケツ[|]する

(6) トウ[|]スイ

A 趣味でトウ[|]ゲイ[|]を[|]たしなむ

B 人気[|]がフッ[|]トウ[|]する

C 世界遺産にトウ[|]ロク[|]される

D 戸籍[|]トウ[|]ホン

(9) ヘイ[|]ガイ

A 新シ[|]ヘイ[|]が[|]発行された

B 激務[|]が[|]続[|]キ[|]ヒ[|]ヘイ[|]する

C 文句ばかり言う客にヘイ[|]コウ[|]する

D オウ[|]ヘイ[|]な[|]態度[|]で[|]嫌[|]わ[|]れる

(10) トウ[|]サク

A 労働者はサク[|]シユ[|]されて[|]いる

B 愛と憎しみがコウ[|]サク[|]する

C トラブルに対してタイ[|]サク[|]を[|]講[|]ずる

D 人生の意味についてシ[|]サク[|]を[|]め[|]ぐ[|]らす

〔問二〕 空欄(2)(3)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A 人間関係

B 個性主義

C 消費社会論

D 政策論

E 教養主義

F 新教育

〔問三〕 傍線(5)「消費活動を通じた人々の差異化」とあるが、その例として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 仕事のために必要な資格を取るために日夜努力し続けており、それに対する出費はいとわない。
- B 自動車を購入する際に、車種や性能に加えて、内装もいろいろ選べるものを選ぶようにする。
- C 常日頃から多くの情報誌に目を通して、それから最新のファッションをいち早く取り入れようとする。
- D ヘアカラーを変えたりカラーコンタクトをつけたりして、少しでも目立とうと一生懸命になっている。
- E 都心暮らしの学生が、話題の店に先駆けて行き、友人たちとの雑談の中でそれとなく話題にしようとする。

〔問四〕 傍線(7)「一九八〇年代の日本」を筆者はどのような社会と考えているか、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 個性化教育とともに「心の教育」が推進されるようになって、おもしろい精神がはぐくまれ、各人の個性を尊重することが当たり前と見なされるようになった社会。
- B 平等な社会になって、すべての人が同じような個性化教育を受けることができ、努力さえすれば、誰もが経済的に成功するチャンスを得られるようになった社会。
- C 戦後の高度経済成長によって未曾有の発展を遂げて米国に次ぐ世界第二の経済大国となって、だれもがそのような日本を誇らしく思うようになった社会。
- D ファッション雑誌などを通じてスターの日常生活が身近に感じられるようになり、自分も次のスターになれるかもしれないと思う若者が増えた社会。
- E 経済的に豊かになり、誰もが他人と同じような生活を送ることができるようになったので、他人との違いをアピールしたいと思う人が増えた社会。

〔問五〕 傍線(8)「差異化のレトリック」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 必死に仕事や勉強に取り組むよりも、毎日が気分よく過ごせばいいのだと勧める言説。
- B だれもが掛け替えのない存在なのだから、無理に一番を目指さなくともいいと人々を励ます言説。
- C 現代社会で注目される存在になるためには少しでも個性を追求しなければならぬと人々をあおる言説。
- D 自分らしさを演出しようとするならば、もっとお金を使わなければならぬと消費活動をうながす言説。
- E 現代社会では人より抜きん出た高い能力が求められるから努力を怠ってはならないと人々を鼓舞する言説。

〔問六〕 傍線(11)「たいへん皮肉な状況」とはどのような状況なのか、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 個性化教育とともに「心の教育」という教育理念がかかげられることによって、子どもが自分が個性的であるとともに素直な良い子であることをアピールするようになった状況。
- B 大人の期待に応えて子どもたちが個性的であろうと精一杯がんばった反動で、その成果が得られなかったために強い挫折感を持ち自分を責める子どもが増えてしまったという状況。
- C 個性重視の教育で個性を伸ばすための新しい学習実践が試みられた結果、学習内容が高度になってしまったため、それに反発してかえって学習を放棄する子どもが増えてしまったという状況。
- D 子どもたちは自分なりに理想を追求して個性的な生き方を追求していたが、結局は社会的要請に応える類型的な生き方を選んだに過ぎないことに気づき、自分を卑下する子どもが増えている状況。
- E 個性を伸ばすことはよいことだと考えて個性的であるよう促したが、その結果、子どもたちは到達目標が見えづらくなり、犯罪によって個性を表現しようとするような者まで出てきてしまった状況。

〔問七〕 次のア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 『なんとなく、クリスタル』に付けられた東京の最先端の流行を紹介する大量の注に若者が注目し、そうした情報をもっと知りたいと思う若者たちの要望にこたえるべくサブカルチャー誌が次々と創刊された。

イ ボードリヤールによれば、高度大衆消費社会において、人々は消費を通じて他人とは違う個性的な自分を演出しようとしながらも、社会があらかじめ用意したわずかな差異を追求するようになる。

ウ 臨教審の「自由化」論によって、すべての学校が相争うように、父母たちに選んでもらえるような、生徒の個性を尊重する独自の教育を推進するようになった。

エ 消費社会においては、他人とは違う何かを自ら作り出すことによってではなく、他人との違いを際立たせることのできる商品を購入することによって、自分らしさをアピールするようになる。

オ 教育において个性的であることが目標とされた結果、特筆すべき才能を持たない子どもたちの中には、自暴自棄になつて異常性を帯びた犯罪に走る者も現れるようになった。

二 次の文章は、近代日本の音楽のあり方について書かれたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。(20点)

唱歌教育はなぜ必要と考えられたのでしょうか？ それは情操を豊かにするためでもなければ、日本という国を豊かな文化に彩られた国にするためでもありませんでした。伊澤修二が中心になって音楽取調掛^{とりしらへがかり}での「取調」の結果をまとめた『音楽取調成績申報書』(一八八四、以下『申報書』と略す)なるものが残されているのですが、そこでは音楽のもつ教育的な意義として、「健康上の関係」と「道徳上の関係」の二つが挙げられています。

「健康上の関係」に関して論じられているのは、人間の生命の一番の基本である呼吸器を鍛えるためには唱歌ほど有効なものはないということです。欧米諸国では小学校の教育に唱歌を導入して以来、人々の健康状態が良好になったという統計があり、現に音楽取調掛や師範学校などでも、その成果で血色が良くなった生徒がいると書かれています。「道徳上の関係」については、喜ばしい歌は人の心を喜ばしくし、逆に悲しい歌は人の心を悲しくするというように、音楽は人心を動かし、魂を導いてゆく力を持つことからして、道徳的な人間を育ててゆくための最良の手段であることが儒教の礼楽思想をひきながら論じられています。子供の頃から唱歌の正しい教育や訓練を受けさせていけば、共同体の中で整然と振る舞うことのできる人間を育てられるはずであるから、秩序正しい社会を作つてゆくためには唱歌教育は不可欠であるといったことが説かれています。

ここで語られているような唱歌⁽¹⁾の効能は、精神的というよりはむしろ身体的な性格の強いものです。そしてまたここでは唱歌は、単なる個人の人格形成をこえて、共同体の形成や維持に資する意味を持つものとして位置づけられています。つまり唱歌は、一つの共同体のメンバーが、それにふさわしい健全な肉体や精神を共有するための不可欠のツールと考えられています。そしてそのように考えてみるならば、まさにできあがるうとしていた近代国家日本の成員たるにふさわしい身体や心構えをもつ「国民」を育てるべく、「国民」が共有すべきものを身体的に刷り込んでゆくための格好の方法として唱歌が導入されたということが想像にかたくありません。明治になって、かくも早々と音楽取調掛が開設され、それが官立の音楽学校へと発展してゆくことが求められた理由は、まさにそういう「国民づくり」のためにほかなりませんでした。

ところで、『申報書』をみていて意外に思えることは、西洋諸国の音楽について、「取り調べ」でそこから学ぶというやり方が、その西洋一辺倒のような見かけとは裏腹に、明治以前の音楽文化を決して否定するわけではなく、むしろその両者の「折衷」に最終的な方向性を求めようとしているという点です。

今日のわれわれには、このような考え方はいささか奇異なものにみえます。というのも、日本音楽にせよ西洋音楽にせよ、音楽は本来、それぞれの〔2〕であり、それぞれを「純正」な形で保つておくことが文化を考える上での正しい態度だというのが、われわれの通常慣れ親しんできた考え方であるからです。だからわれわれは、シヨパンのワルツを三味線で弾こうとか、逆に《六段》や《越後獅子》をギターで弾こうなどは普通は考えません。もちろん、とりわけ大衆音楽レベルでは、その種のことはいざし行われますが、それはせいぜい変わり種として話の種になるくらいで、これこそが日本音楽のあるべき姿であるなどとは考えないでしょう。

しかしこのような考え方は、決して自明なものではありません。もっと言うてしまえば、混淆こんごうを嫌い、混じりもののない「純正」な文化こそが本来のあり方だと考える「純正文化イデオロギー」とでもいう考え方自体が、近代特有の、いささか特殊なものの考え方なのです（その行き着いた先で、ナチスが「純正」なゲルマン文化を求めるためにユダヤ人を撲滅しようとしたことが思い出されます）。素直に考えてみれば、文化はいろいろ混淆しながら姿を変えてゆくのがノーマルであり、文化を「純正」に保つたまま保存するなどという考えの方が、何らかのイデオロギーと結びついて出てきた、よほど不自然な考え方とみるべきなのです。ですから、西洋音楽を取り入れるに際しても、「直輸入」による西洋化をはかるか、それとも西洋化を拒否して日本の伝統を守るか、などという二分法ではなく、両者を折衷して新しい音楽を作り出してゆくというような方向性が打ち出されたとしても決して不思議なことではありませんでした。

『申報書』では、「取り調べ」の結果、西洋の音階も日本の音階も、両者ともインドに起源があり、一方でギリシャを經由して西洋に入ったものが西洋の音階になり、他方で中国を經由して日本にやってきたものが日本の音階になったという関係であるから、その成り立ちからして両者は同一であるという認識が示されています。そしてそのような認識をふまえ、日本としては西

洋の七音階と日本の五音階のよいところをとって折衷することによって、どちらの限界をも克服した優れた音階を作り出すことができるのであり、そのような方向での折衷を推し進めてゆくことに今後の日本の音楽の方向を見いだすべきであるという結論が出されています。日本音楽の基本である五音階が西洋の七音階とは全く別の文化をなしていると考えている今のわれわれには、この結論はなかなか理解しがたいものです。

西洋から大量の外国人教師を招聘して「本場」の音楽のしくみを習得することは、今日の感覚では、日本の「国民音楽」を創成するという、いささか国粹主義的な匂いのある事業とは背馳するよう思ってしまうのですが、彼らのロジックにたつならば、西洋音楽を導入することと日本固有の国民音楽を追求するということは両立しうることになります。東京音楽学校のもっていた、一見相容れない二つの方向性、つまり、「西洋直輸入」の輸入元としてのあり方と、「国民音楽」創成の拠点としてのあり方とは、このロジックの中では矛盾なく共存していました。日本の西洋音楽受容と、そこにおける「国民音楽」のあり方を考える際には、そこでの動きが常にこうしたロジックを背景としていたことを念頭に置いておく必要があります。これは必ずしも東京音楽学校だけの問題ではありませんでした。少なくとも第二次世界大戦前の音楽家たちは多かれ少なかれこのような感覚を共有しており、一見「西洋直輸入」の音楽に没頭しているようにみえていても、頭の片隅のどこかに「国民音楽」創成という最終目標への意識を持ち続けていたように思われるのです。

もつとも、ここにみられたような認識は、後には、日本の帝国主義化のプロセスと絡みながら、日本文化こそは西洋文化と東洋文化の良いところだけを集めた優れた文化であり、それゆえにアジアの盟主として指導的な位置を占めるのは当然であるという、「大東亜共栄圏」を正当化するイデオロギーにつながってゆく、問題含みのものでもありました。しかしいずれにしても、「日本文化」を「純粹種」としてではなく、ハイブリッドなものとして、そして保存すべき伝統としてではなく、たえざる進歩によって時代の先頭を切るものとして表象するようなもの見方は、現代の日本にみられる「日本文化」観とは非常に違っていたことを認識しておかなければならないでしょう。

(渡辺裕『歌う国民』による)

注 伊澤修二……音楽教育学者、文部官僚（一八五一～一九一七）。一八七九（明治一二）年に開設された音楽取調掛の担当官となり、一八八一年には音楽取調掛長の任に就いた。《六段》や《越後獅子》……江戸時代の楽曲。通常、箏そうや三味線で演奏する。東京音楽学校……東京芸術大学の前身の一つ。

〔問一〕 傍線(1)「唱歌の効能」とあるが、筆者は「唱歌の効能」をどのようなことにあると考えているか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 情操を豊かにするというより、近代国家に有用な人材を育てること。
- B 音楽を楽しめる人を作るというより、心身を健康にすること。
- C 魂を道徳的な方に導くというより、道徳を身体に刷り込むこと。
- D 情緒の形成というより、伝統的な共同体の維持に役立つこと。
- E 国民としての心構えの育成というより、壮健な身体を作ること。

〔問二〕 空欄(2)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 民族を代表するもの
- B 文化に固有のもの
- C 共同体をつなぐもの
- D 国家に必須のもの
- E 伝統の要をなすもの

〔問三〕 傍線(3)「彼らのロジック」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 西洋音楽と日本音楽は両者ともインドに発したもので、発達の段階が違っただけだから、両者を折衷して、西洋音楽をもとにしてさらに進歩した最先端の「国民音楽」を作るべきである。

B 西洋音楽と日本音楽は両者ともインドに発したものであるから、西洋音楽を輸入しても日本音楽の伝統は揺るがず、西洋音楽を日本化することで優れた「国民音楽」を作るべきである。

C 西洋音楽と日本音楽はもともとインド音楽から枝分かれしたものであるから、折衷することができ、それぞれの良いところを取り合わせて最も優れた「国民音楽」を創成すべきである。

D 西洋音楽と日本音楽はインドに同一の根を持つものであるから、音楽学校は西洋音楽を輸入して日本に広めることと並行して、日本独自の「国民音楽」を創成することを行うべきである。

E 西洋音楽と日本音楽はインド音楽から枝分かれしたものであるから、音階は違っとはいえそれぞれに共通する部分はあるので、それをもとに、最先端の「国民音楽」を作るべきである。

〔問四〕 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 明治初期には、伝統文化を守って西洋に対抗できないという考えに従って、心身を鍛える目的で唱歌教育が取り入れられ、唱歌を通して近代国家にふさわしい音楽文化が形作られることになった。
- B 戦時中の日本では、日本は西洋文化を取り入れながら日本文化を発展させて、優れた文化を創り出したので、「大東亜共栄圏」の盟主にふさわしい、という考えの下に日本文化をアジア各国に広めていた。
- C 文化を純粹なものと外来のものに分け、純粹なものを保存していくことがよいと考えるのは、純粹種を高く評価することであり、場合によっては他民族を徹底的に排除しようとする危険思想にもつながる。
- D 現代の日本人は、現在の日本文化を伝統的な文化に外来の文化が侵入してできてきたものと考え、伝統的な文化を保存しようと考えがちだが、このような考え方は日本古来のものである。
- E 日本は、近代化にあたって、進んだ西洋文化を規範にしながらも自らを西洋文化に同化させようとはせず、日本文化をもとに西洋の文物を取り入れていく折衷主義の態度を取った。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

今は昔、禅林寺の僧正と申す人おはしけり。名をば深禅とぞ申しける。これは九条殿の御子なり。きはめてやむごとかなりける行人なり。その弟子に徳大寺の賢尋僧都といふ人ありけり。

その人、いまだ若くして、東寺の入寺になりて拜堂しけるに、大破子の多く要りければ、師の僧正、「破子三十荷ばかり調べてやらむ」と思ひたまひけるに、禅林寺の上座にて助泥といふ僧ありけり。僧正、その助泥を召して、「しかしかの料に破子三十荷なむ要るべきを、人々にいひて催さむ」とのたまひければ、助泥十五人を書き立てて、おのおの一荷を宛てて催さしむ。僧正、「今十五荷の破子は誰に宛てむとするぞ」とのたまひければ、助泥が申さく、「助泥が候ふこそは破子候ふよ。皆も仕うまつるべけれども、催せと候へば、半らをば催して、今半らをば助泥が仕うまつらむざるなり」と。僧正これを聞きて、「いとうれしき事なり。さらばとく調べて奉れ」とのたまひつ。助泥、「さらば、さばかりの事せぬ貧窮ひんくはある。あないとほし」といひて、立ちて去りぬ。

その日になりて、人々に催したる十五荷の破子、皆持て来たりぬ。助泥が破子いまだ見えぬ。僧正、「あやしく、助泥が破子の遅きかな」と思ひたまひけるほどに、助泥、袴はかまの括くりを上げて、扇を開きつかひて、したり顔かにて出で来たり。僧正これを見たまひて、「破子の主、ここに来にたり。いみじくしたり顔にても来たるかな」とのたまひけるに、助泥、御前に参りて、首を持ち立てて候ふ。僧正、「いかにぞ」と問ひたまへば、助泥、「その事に候ふ。破子五つ、え借り候はぬなり」と、したり顔に申す。僧正、「さて」とのたまへば、声を少しひきになして、「今五つは入るる物の候はぬなり」と申す。僧正、「さて今五つは」と問ひたまへば、助泥、声をいみじくひそかにわなななして、「それは搔かき絶えて忘れ候ひにけり」と申せば、僧正、「ものに狂ふ奴かな。催さましかば、四五十荷も出で来な(7)。こやつはいかに思ひてかかる事をば罽かきつるぞ」と問はむとて、「召せ」とののしりたまひけれども、あとを暗くして逃げ去いにけり。この助泥は、ものをかしういふ者にてなむありける。これによりて「助泥が破子」といふ事はいふなりけり。

〔『今昔物語集』による〕

注 九条殿……藤原師輔。
行人……仏道修行者。 入寺……真言宗における僧侶の階級。阿闍梨あじかりに次ぐ。

拜堂……新任の僧が着任報告のために行う本尊拜礼の儀式。 大破子……大きな破子。破子は檜ひのきの薄板を折り曲げて

作った、食物を入れる器。 荷……肩に担えるだけの量を数える単位。 上座……寺務を取り仕切る僧。

括り……衣類の裾や袖を括る紐。
ひきになして……低くして。

〔問一〕 傍線(1)(2)(6)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) 「やむことなかりける」

- | | | | |
|--------------|------|-----|----|
| ┌──────────┐ | | | |
| D | C | B | A |
| 自分勝手な | 力のある | 優雅な | 尊い |

(2) 「料に」

- | | | | |
|--------------|-----|-----|-----|
| ┌──────────┐ | | | |
| D | C | B | A |
| 費用に | 用途に | 資料に | 料理に |

(6) 「したり顔」

- | | | | |
|--------------|-------|--------|---------|
| ┌──────────┐ | | | |
| D | C | B | A |
| 訳知り顔 | とぼけた顔 | 得意そうな顔 | 恥ずかしげな顔 |

〔問二〕 傍線(3)「助泥が候ふこそは破子候ふよ」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 私が声をかければ、皆が破子を持つてくるに違いありません。
- B 私が破子を上手に作れることは、皆が知っておりますよ。
- C 私がいるからには、破子はそろったも同然でございます。
- D 私がよく行くところには、破子がたくさんございます。
- E 私のよく知っている人が、破子を作っておりますよ。

〔問三〕 傍線(4)「あないとほし」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 破子を準備できるか心配している僧正を見て、かわいい所もあるなと思っている。
- B 僧正から貧乏人のように思われていることを知り、腹立たしいと思っている。
- C 破子を用意することができると安請け合いましたものの、不安に思っている。
- D 僧正が貧乏人にも用意させるように言うのを聞いて、気の毒だと思っている。
- E 僧正から破子十五荷を準備できるか念を押されたことを、残念だと思っている。

〔問四〕 傍線(5)「袴の括りを上げて、扇を開きつかひて」とあるが、助泥がそうした理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 拜堂の儀式にはそのような服装で臨むべきであったため。
- B 破子の件で僧正から叱られたときにすばやく逃げるため。
- C 僧正の要望をかなえるために直前まで走り回っていたため。
- D 破子を集めるために必死に働いたという雰囲気を出すため。
- E たくさんの破子を一人で運んで来たと言と僧正に思わせるため。

〔問五〕 空欄(7)に入る助動詞としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A まし
- B ましか
- C まほし
- D む
- E め

〔問六〕 次の文ア～エのうち、助泥が破子について述べたことと、合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 一人で三十荷すべてを集めるのは難しい。
- イ 五荷はすでに誰かに借りられていた。
- ウ 五荷は入れる物が見つからなかった。
- エ 五荷はすっかり忘れてしまった。

〔問七〕 傍線(8)「ものをかしよういふ者」とはどういう人物のことか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 失敗しても言い訳をするばかりで、何も学ばない人。
- B 話し方に愛敬があつて、うそをついても憎めない人。
- C 調子の良いことばかり言つて、実際には何もしない人。
- D 後先考えずに物を言い、約束を守れないことが多い人。
- E 巧みな話術で楽しませ、笑いを提供するのが好きな人。

